

## 第6章 悪性腫瘍

### 1. 調査の背景

わが国の慢性透析患者の死因は、2019年調査では心不全が最も多く（22.7%）、次いで感染症（21.5%）、悪性腫瘍（8.7%）、脳血管障害（5.7%）、心筋梗塞（3.9%）であった<sup>12)</sup>。これは、日本人の死因の1位が悪性腫瘍（27.3%）、2位が心疾患（15.0%）、3位が老衰（7.8%）、4位が脳血管障害（7.7%）、5位が肺炎（6.9%）、6位が誤嚥性肺炎（2.9%）であるのと大きく異なる<sup>13)</sup>。また、一般人口では悪性腫瘍による死亡が年々増加傾向であるのに対して、透析患者では近年約9%である。透析患者においては悪性腫瘍の発症が一般人口より多いといわれているものの、大規模な研究はこれまでそれほど多くはない。このため、2020年末時点の慢性維持透析患者を対象に、悪性腫瘍の罹患率を調査した。当該調査は日本透析医学会の統計調査において1987年以來の調査である。

### 2. 悪性腫瘍の有無と種類

2020年末に慢性維持透析を行っている336,759人のうち、248,871人（73.9%）において現在罹患中の悪性腫瘍の有無について回答が得られた。男性患者164,641人のうち、何らかの悪性腫瘍を罹患している割合は9,867人（6.0%）、女性患者では84,230人のうち3,777人（4.5%）と男性患者で高率であった（図35、補足表36）。

悪性腫瘍の種類については、悪性腫瘍ありと回答があった13,644人のうち、12,964人から回答が得られた。同一症例が複数の悪性腫瘍を合併（多重がん、重複がん）していることもあるため、3つまで回答可とした。そのため、後述するそれぞれの割合は「悪性腫瘍の種類に回答がある患者数」に対するものであり、合計は100%とはならないことに留意されたい。男性では1位が腎泌尿器系（43.8%）、2位が消化器系（29.5%）、3位が呼吸器系（14.7%）であった。女性では1位が乳腺・内分泌系（25.8%）、2位が消化器系（25.4%）、3位が腎泌尿器系（14.5%）であった（図36、補足表37）。男性の腎泌尿器系には前立腺がんが含まれるため、高率となっている。また、年齢別、透析歴別の悪性腫瘍の種類を図37と図38に示す。

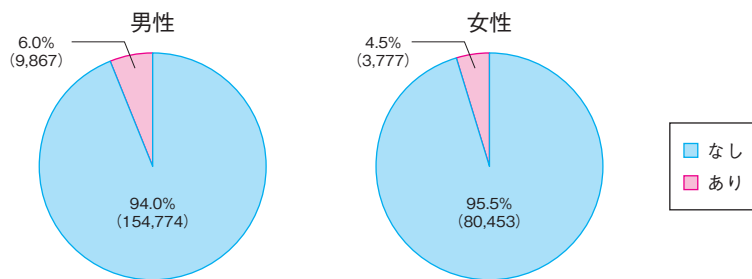


図 35 悪性腫瘍の有無と性別，2020 (患者調査による集計)

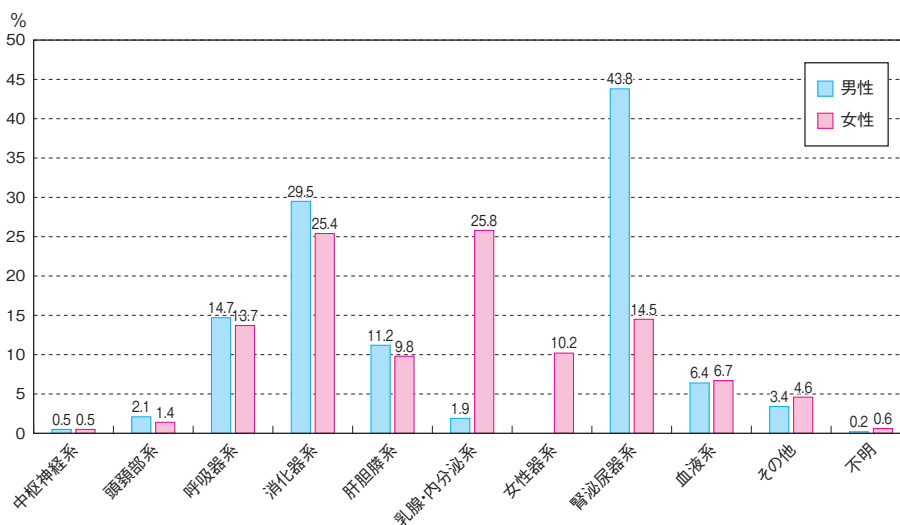


図 36 悪性腫瘍がりの患者 悪性腫瘍の種類と性別，2020 (患者調査による集計)

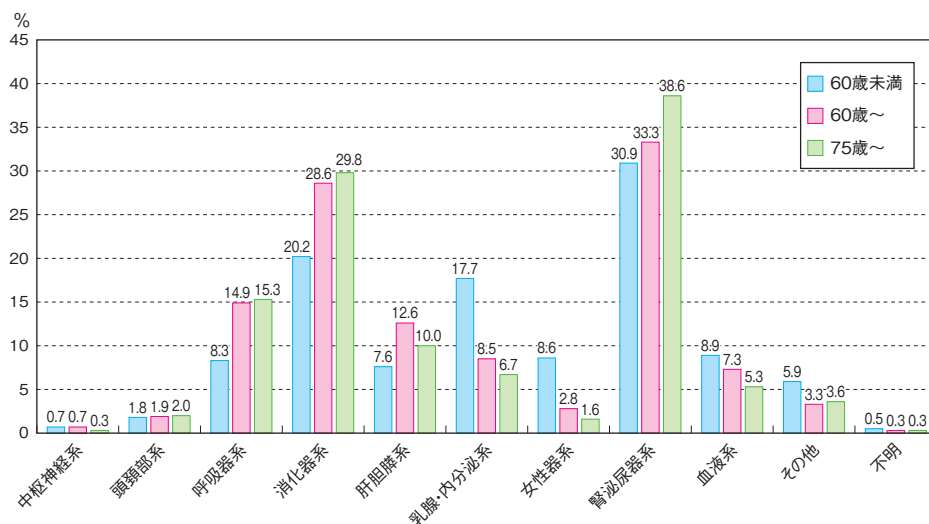


図 37 悪性腫瘍がりの患者 悪性腫瘍の種類と年齢, 2020 (患者調査による集計)

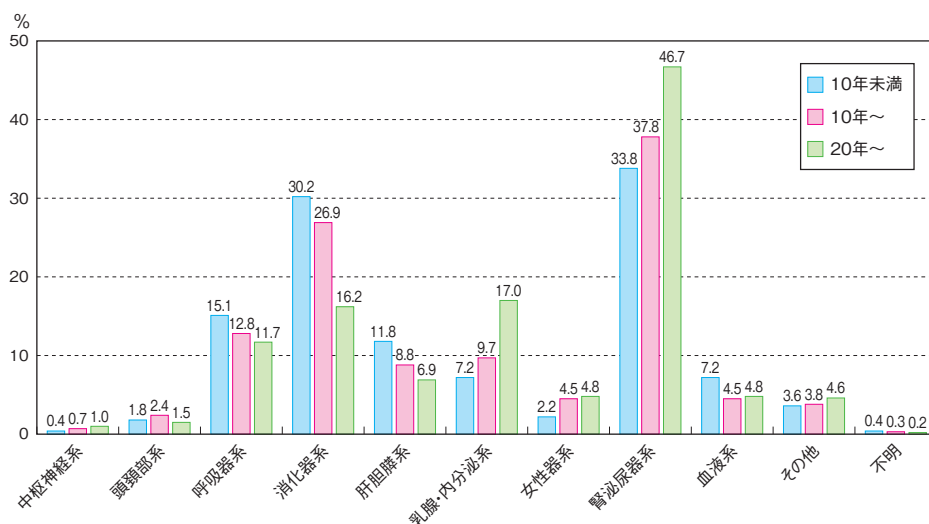


図 38 悪性腫瘍がりの患者 悪性腫瘍の種類と透析歴, 2020 (患者調査による集計)

1987年の調査では男女別の調査は行われていない。1987年末に慢性維持透析を行っている80,075人のうち、悪性腫瘍ありの回答は1,041人で、部位別に回答があったのは974人であった。部位別では1位が胃がん(28.4%)、2位が腎がん(10.2%)、3位が肝・肝内胆管がん(7.4%)であった<sup>14)</sup>。

死因からの調査では透析患者の悪性腫瘍を十分に把握できない。それは、近年の医学の進歩によって、悪性腫瘍は、より早期に発見され、治療が可能となったため、必ずしも死因にはつながらないと考えられる。移植患者においては悪性腫瘍の頻度が高いことはよく知られているが、透析患者でも一般人口と比較して発症頻度が高いとする報告が多いが、そうでない報告もある<sup>15~18)</sup>。透析患者の悪性腫瘍が一般人口と比較して多いかどうかは標準化罹患比(standardized incidence ratio: SIR)で評価されるべきであり、詳細な検討が必要である。さらに、保存期からすでに発症していたのか、あるいは透析導入後に悪性腫瘍を新規で発症したのかなど不明な点が多いため、さらなる検証が必要である。